

目指す学校像	○自分と共に他の人を大切に作る学校 (自他共愛)
--------	--------------------------

重点目標	1 学びの自律と個別最適化の実現に向けた情報端末の活用と授業改善の推進 2 安心・安全な学校づくりに向けた教育支援・相談体制の充実と交通安全教育の推進 3 3者の連携による交通安全教育・環境教育とポストコロナの学校運営の推進 4 ICT活用能力向上、コーチングの視点を導入した指導力向上に向けた教職員研修の充実
------	--

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学校自己評価			年度評価		学校運営協議会による評価	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	実施日 令和7年2月12日
1	(現状) ○R5 全国学力・学習状況調査では国語、算数とも埼玉県平均より4ポイント低く、市平均より7ポイント下回る結果である。 ○R5 全国学力・学習状況調査において、「課題の解決に向けて自分で考え、自ら取り組んだか」の肯定的な回答が85.5%であり、主体的に学習に取り組もうとしている児童が多い。 (課題) ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、特に国語の「話すこと聞くこと」「読む力」の問題形式の正答率に課題がある。 ○算数の思考力・判断力・表現力に課題が見られるので、「主体的・対話的で深い学び」のある授業を実践していくことが課題である。 ○基礎的な知識及び技能の定着に課題があり、学校で学習を振り返る、繰り返し学べる機会をつくっていく必要がある。	・個別最適化に向けた情報端末の活用と授業改善 ・「分かる」「できる」が実感できる学習環境の整備・授業実践	①タブレット端末を活用し、児童の学習への取組状況・つまづきを確認し、個別最適な学習ができるようにする。 ②各教科のねらいの達成のために、どのようにタブレット端末を活用できるか吟味し、オクリンクやムーブノート等を積極的に活用し、児童の表現力向上を図る。	①学校評価アンケート(児童)の学習の理解に関する項目で「よくあてはまる」の割合が75%以上となったか。(昨年度64.8%) ②学校評価アンケート(児童)のタブレットの活用に関する項目で「よくあてはまる」の割合が75%以上となったか。(昨年度64.2%)	①学校評価アンケートでは、「よくあてはまる」の割合が59.1%となり、昨年度を下回る結果となった。肯定的な評価は、90.1%であった。 ②学校評価アンケートでは、「よくあてはまる」の割合が62.6%となり、昨年度を下回る結果となった。肯定的な評価は、92.8%であった。 ①②の評価指標は、目標値に達することはできなかったが、アプリの更新などもあり、ICT活用の幅は広がっている。教職員同士の教え合う姿が多く見られ授業改善になっている。	B	○本校の児童の実態から見える学習への課題解決に向けた授業実践を行う。 ○タブレット端末の有効活用を含めた授業方法の工夫・改善を図る。また、ICT活用に偏らず、解決方法や表現方法の1つとしてより効果的に活用できるようにしていく。 ○スクールダッシュボードの活用により児童の学習のつまづきを早期発見し、その子に応じた指導を実践し、「個別最適な学び」につなげる授業改善を行う。	①ICTは選択して利用し、実際に書くことも大切なので(漢字が書けなくなる懸念)利用率の考察を。また、教職員の数値の低さが気になる。自己評価を厳しくしている教職員が多い。評価規準を全体で共有するとよいのでは。 ②寝不足など生活面に影響が出るのでタブレットの適切な使い方を指導してほしい。 ③自主学習の内容指導をしっかりするなど量より質を上げる指導が求められる。 ④先生が主体的に課題を提示し、子ども達が興味を示す授業を今以上に工夫して実施できるとよい。 ⑤子ども達は間違いを恐れず発言しいろいろな考え方をあることを教師が示し、様々な考えを認めあえるようになることよい。
2	(現状) ○R5 全国学力・学習状況調査において、「学校に行くのは楽しい」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は95.2%であった。 ○昨年度のいじめ認知件数7件、不登校児童27名であった。学校評価アンケート(児童)の教育相談に関わる項目で肯定的な回答をした児童の割合は、73.3%であった。 ○保護者、地域との連携を図り、通学路点検を実施(今年は4回計画)している。 (課題) ○悩みを打ち明けられていない児童がいる現状より、話せる雰囲気・環境づくり(教職員のカウンセリングマインドの向上)と家庭との連携を図り、組織的な支援・相談体制づくりをより構築していくことが課題である。 ○通学路について、保護者・地域との連携のもと、警察等への要望を継続するとともに、児童への安全指導を徹底し、自ら危険を予測、回避する力をはぐくむことが課題である。	・児童に寄り添う生徒指導・教育相談体制の充実 ・交通安全に対して主体的に取り組むことができる児童の育成に向けた交通安全教育の推進	①組織的な教育相談体制を充実させ、アンケート・面談を実施し、児童の実態を把握する。 ②教職員のカウンセリングマインドの向上を図るための研修会を実施する。 ③Solaの一むを保護者に周知し、登校への不安感を軽減させる。 ④スクールダッシュボードの有効活用を行い、子どもたちのサインを見逃さないシステムづくりを行う。	①学校評価アンケート(児童)の関連する項目の肯定的な回答の割合が80%以上となったか。(昨年度73.3%) ②学校評価アンケート(教職員)の関連する項目の「よくあてはまる」の割合が80%以上となったか。(昨年度68%) ③Solaの一む、スクールダッシュボードについて、運営システムを構築することができたか。	①学校評価アンケートでは、肯定的な回答の割合が72.4%となり、昨年度を下回る結果となった。保護者との面談の実施により、保護者と共に児童理解を深めた結果、形態変更新たに13人、通級指導教室が新たに3人手続き(1月現在)をし、関係機関につなげることができた。 ②学校評価アンケートでは、「よくあてはまる」の割合が63.2%となり、昨年度を下回る結果となった。しかし、肯定的な回答は100%なので、教職員は実践できていると感じている。 ③Solaの一むは、校長室を中心に、12人が利用した。教室に入りにくい児童の学習の場を用意できた。学習の機会やSolaの一む内の児童同士の交流ができ、有効な成果が出た。	A	○心と生活のアンケートや月1回のSOSアンケート、スクールダッシュボードの活用による、児童のSOSを早期に発見し、生徒指導・教育相談に生かす。 ○児童・保護者に寄り添う教職員を目指し、校内研修・資質向上を図るための情報共有を実施する。 ○特別支援コーディネーターを中心とした校内体制の構築とSC、SSW等の積極的な活用による相談体制づくりを行う。 ○Solaの一むの運営を工夫改善し、教室に入れない児童の居場所づくりをすすめる。	①相談体制など6組も弾力的に使っている。 ②Solaの一むが登校への安心感につながっている。何人も教室に復帰できていて成果が出ている。 ③スクールダッシュボードのよりよい運用を。 ④登校班が横に広がったり、態度がよくなったりしている。班長会議をより一斉下校での指導が必要。 ⑤通学路の変更は皆で話し合っ決めていく。 ⑥保護者からの登下校に関する要望は例年より少なかった。 ⑦働く保護者が増えたからか、通学指導を業者に任せられないかとの意見があった。
3	(現状) ○昨年度、学校運営協議会での熟議を重ね、学校、家庭、地域の3者による自然園の環境整備、通学路の安全確保の2つについては継続することが決まっている。 (課題) ○3者がそれぞれに取り組むこと、連携を図って取り組むことについて、具体的な方策を熟議し、形にしていく必要がある。取組については、情報発信を行い、周知していきたい。	・環境整備・安全教育を中心とした3者協働活動の推進 ・開かれた学校づくりを目指した情報発信とポストコロナの学校運営の推進	①「潤い自然園」の整備を計画的に進め、SDGsと関連付け、児童の探求的な学びを実践できるようにする。 ②通学路の課題に向けたプランに基づき、具体的な方法を定め、学校と保護者、地域と協働した取組を始める。	①「潤い自然園」が、日常的に授業で活用できる環境となったか。 ②学校、家庭、地域が協働し、通学路の課題解決に向けた取組を実施することができたか。	①6年生の総合的な学習の時間への位置付け、児童によるSDGsと関連付けた環境整備が取り組める計画を構築することができた。「潤い自然園」を利用しやすくなるための道の整備や池の改修など児童のアイデアを生かした探究的な学びになった。 ②引き渡し訓練の際に、保護者と児童と一緒に帰ってもらい、一斉に通学路点検をすることができた。	A	○「潤い自然園」の整備に向けた予算の確保を行う。道の整備については拡張をしていく。 ○学校全体として「潤い自然園」を利用する活動を増やし、自然愛護の心、環境に対する意識をもつ児童の育成を図る。 ○保護者・地域の方からの児童の登下校時の歩き方や地域の交通事情の様子をうかがう情報交換会を実施する。	①潤い自然園の水辺のエリアで子どもが溺れないよう注意。 ②潤い自然園についてホームページで情報発信したらどうか。 ④ペーパーレス化はよい取り組みである。ペーパーレス化は保護者の理解は得やすい傾向。欠席の連絡もフォームが定着した。 ⑤地域への学校だよりは紙であれば見る。
4	(現状) ○授業におけるICT活用は進んだが、個人差がある。 ○高学年での教科担任制の実施は、担当教科において、より深い教材研究を行うことができている。 (課題) ○ICTの活用について、教員間の技能、活用能力の差をなくし、学び続けられる環境づくりが求められる。 ○教科担任制の課題として、自分が担当しない教科について、教材研究をしたり、授業を見合い、授業の質の向上を目指したりすることについて課題がある。	・ICT活用研修と指導法向上研修の実施	①タブレット端末を活用した授業を実践する。エバンジェリストによる研修会・情報伝達を毎月実施する。 ②今年度から取り組んでいる、各教員チームによる授業改善の研修を充実させ教師自ら個別最適で協働的な研修を実践する。	①全ての教員が「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、日常的にICTを活用する状況になったか。 ②学校評価アンケート(教職員)の関連する項目の「よくあてはまる」の割合が30%以上となったか。(昨年度20%)	①エバンジェリストによる、定期的な情報提供がなされ、ICT活用(子どもたちにタブレットを効果的に活用した学習に関して92.2%の教職員が肯定的な回答)ができている。 ②学校評価アンケートでは、「よくあてはまる」の割合が22.5%となり、昨年度を上回る結果となったが目標は達成できなかった。しかし、本年度の研修では、各教員チームによる授業改善の研修を充実させ教師自ら個別最適で協働的な研修を実践することができた。	B	○ICT活用研修の継続実施と、学校内外の授業での活用例の紹介を行い、教員の資質向上を図る。 ○研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励を実施する。 ○各教員チームによる授業改善の研修を充実させ、教師自ら個別最適で協働的な研修を来年度も継続して実践する。	①校内の研修を充実させ、子どもたちの得意・不得意の解消を目指しているのはすばらしい。 ②研修と共に、教職員のよい関係をさらに広げたい(雑談ができる職員室など)。